

Essay

Sapiarc.com

2015年2月26日(2015-2)

2・26 事件と府立一中

今日は2月26日だ。それで何かを思い出す人は、私と同年ぐらいか年上の人たちだけかもしれない。79年前の1936年(昭和11年)の今日、日本のその後の進路に大きな影響を与えた事件が起きたのだ。この事件に関係したことは、私のこのエッセイの「2・26 事件から75年」(2011年2月27日)にも書いた。

今年は79周年という中途半端な年数なので、特別なことはないようだが、昨夜のNHK総合テレビ「歴史秘話ヒストリア」で、「妻の見た二・二六事件」が放映された。私は一応見たが、私がこれまでに知らなかったことはほとんどなかった。要するに、反乱軍に襲われて、4発の銃弾を受けて瀕死の鈴木貫太郎侍従長を、たか夫人が「とどめを刺すのは止めてください」と言って、身体を張って止めさせたために、鈴木貫太郎は一命を取り留め、のちに総理大臣として終戦を実現させたという史実を再現したものだ。

たか夫人(結婚前の氏名は足立たか)は札幌の生まれで、特別な家系の人ではない。東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)を卒業後、明治38年から、のちの昭和天皇で、当時4歳だった迪宮(みちのみや)の養育係になり、数年を過ごした。この期間、たかは迪宮の事実上の母親で、迪宮はたかの言うことを素直にきく性格の持ち主だったようだ。ずっと後の昭和53年に、昭和天皇は「たかとは、本当に私の母親のように親しくした」と記者会見で述懐している。なお、たか夫人は鈴木貫太郎には後妻

で(先妻は病死)、夫妻の年齢は16歳も違っていた。

自宅で眠っていた鈴木侍従長を襲った部隊の指揮者は安藤輝三陸軍大尉だった。この人は以前に鈴木侍従長に会って話をしたことがあり、退役しているとはいえ海軍大将の鈴木にとどめを刺すのを躊躇したようで、むしろ部下に「閣下に敬礼」と言い、捧げ銃の礼をさせて引き上げたという。

2・26事件の舞台となったのは、霞ヶ関官庁街から赤坂見附あたりまでの地域で、そのなかには、私の出身高校である日比谷高校(旧府立一中)もある。日比谷高校は地下鉄赤坂見附駅の近くにある。日枝神社と道路を隔てて隣り合っており、国会議事堂の裏側とも谷のように低くなっている部分を挟んで向かい合っている。こういう場所にありながら、日比谷高校と呼ばれているのは、昭和4年にこの場所に建てられた新校舎に移転する前の約30年間、それまでの校舎は日比谷公園の西側にあったからだ(その場所には現在法務省がある)。

2・26事件が起きたとき、当時の府立一中では何があったのか、「日比谷高校百年史」で調べて見た。この本は昭和54年に出版されたもので、上中下の3巻に分かれた大部なものだ。その中で2・26事件に直接触れている記載は、昭和11年7月発行の如蘭会会報12号(如蘭会は同窓会の名称)に学校当局談として出たものの転載である。したがって、ここでは、少し長くなるが、これを再転載する。

『2月26日朝、生徒の登校に際し、三宅坂、赤坂見附附近において、突然警戒中の兵士にその通行を差止められたるため、授業開始を一時延期するの止むなきに至り、一方重大事変突発の風説も頻々として伝わりしを以て、確実なる情況を探查せしめたる所、形勢実に容易ならず、しかも本校は危険区域の中心に接すること明らかなりしを以て、電話を以て東京府と打合わせの結果、授業を臨時休業して、生徒一同を帰宅せしめることとし、職員はなお学校に居残りて諸般の情勢を待ちしに、この事件は急に解決の見込みなきを確かめれば、即ち翌27日も休業に決し、その旨速達郵便を以て保証人に洩れなく通知し、特に宿直員を増加して御真影の守護、重要書類の保管及び火災盗難の警戒に当らしめたり。27日職員一同出勤せしも、形勢は変化を見ず、よって28日も休業に決し、保証人に対する通知状を準備する間も、刻一刻と憂慮すべきものあるを認めれば、さらに28、29日の両日を休業することに改めてそれぞれ発送を終りたり。既にして28日に至るも形勢依然たりしが、一方入学考査に関する校務は頻りに切迫し来れるをもって、職員はこれを処理しつつありし間に、事態はにわかに悪化し来れるをもって、校長以下数名の職員は徹宵警戒に当り、万一の場合における避難の準備を整えたるに、夜に入りて果たして老幼婦女の難を本校に避くるもの陸続として来り、その数四百名に達したれば、本校はこれを地下室に収容保護したり。翌29日早朝戒厳司令官の「兵に告ぐ」の布告あり、本校前閑院宮御邸にラウドスピーカーを据えありしを以て、音声朗々として暁天に響き、一同感泣禁ずる能わず。間もなく当局より退去避難すべき命あり、附近避難民も四谷方面に去りたるを以て、校長は職員とともに御真影を奉じて渋谷区大和田小学校に赴き、同校の奉安所に安置せり。時に午前7時なり。しかるに同日午後3時過ぎに至り、騒擾鎮定の報ありたれば、直ちに御真影を奉護して同小学校を出で、4時45分無事本校に帰着せり。

この事件は主として本校の周囲に発生せるをもって、一時は如何なる事態に至るものかと、すこぶる憂慮したりしが、幸いに何等異常なく、

生徒もよく命令に従ってその行動を慎み、休業4日の後、万事平素の如く教育上支障なかりしは、一同の安堵せるところなりき。よって30日始業開始に当り、校長より生徒一同に対し、この際流言蜚語に迷うことなく冷静もって学業に励むべく、特に国憲国法を遵守し、いかなる場合も直接行動に出ずるが如きは帝国臣民の本分を全うする所以にあらざる旨を訓示し、一面父兄に対しても書状を以て、事件中における本校の措置を報告し、今後の注意を求めたり。』
(筆者注：昭和11年(1936年)は閏年だったはずだが、30日があるのは変だ。)

この文章は、実際には当時の西村房太郎校長によるものであろうと思われる。この校長は気骨のある人物だったようで、それが上記の文章の最後の部分に表れており、反乱軍の指導者への批判になっている。今の若い人たちには読みづらい文章だと思う。ここで御真影(ごしんえい)と言っているのは天皇のお写真のことで、ここでは昭和天皇のお写真を立派な額縁に入れたものだったはずだ。こういうものが全国の小学校と中学校などにはあって、それを収納するための特別な建物もあったのだ。これは私が入学した西宮市立甲東小学校(当時は国民学校)の校庭の一番東側にあり、奉安殿(ほうあんでん)と呼ばれていた。儀式があるときには、校長がこの建物に最敬礼をしていたが、戦後直ぐに取り壊されたと記憶する。上記の文章のなかで、私にわからないのは、閑院宮邸のことだ。私が日比谷高校生だったときには、そのお邸はおそらく空襲で焼けてなくなっており、その跡地は米軍に接収されて、Jefferson Heightsと呼ばれていたのではなかったかと思う。そうだとすれば、現在の赤坂エクセル東急ホテルの裏側から衆議院議長公邸、参議院議長公邸がある場所ではなかろうか。こういうことは、今では憶えている人はほとんどいないので、当時の詳しい地図を見ないとわからないだろう。

2・26事件の舞台となった場所の建物で今でも一応残っているのは、当時の首相官邸だけではないだろうか。ただし、この建物も現在の首相官邸が建てられたとき、南側に50メートルほど移動させたとWikipediaに書いてある。確

かに、元は外の道路から玄関が見えたが、今では奥まっけて、見えにくくなっている。現在の名称は首相公邸で、本来首相はここに住むべきなのだが、実際に住む首相はほとんどいないらしい。その原因は、ここには兵隊の幽霊が出ると言われていることだ。実際に見たという首相や首相夫人がいるそうで、最近では鳩山元首相夫妻がそうだ。これは気味の悪い話だが、2・26事件の影響が現在にまで潜在的に及んでいることを示すものかもしれない。（おわり）